2016・2号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

39号
2016・12-2017・6

◉特集◉

「北前船」のまちを巡る

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

わたしの直江津とは

国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける

春日山城と越後府中❸

―平成二八年七月二七日の春日山―

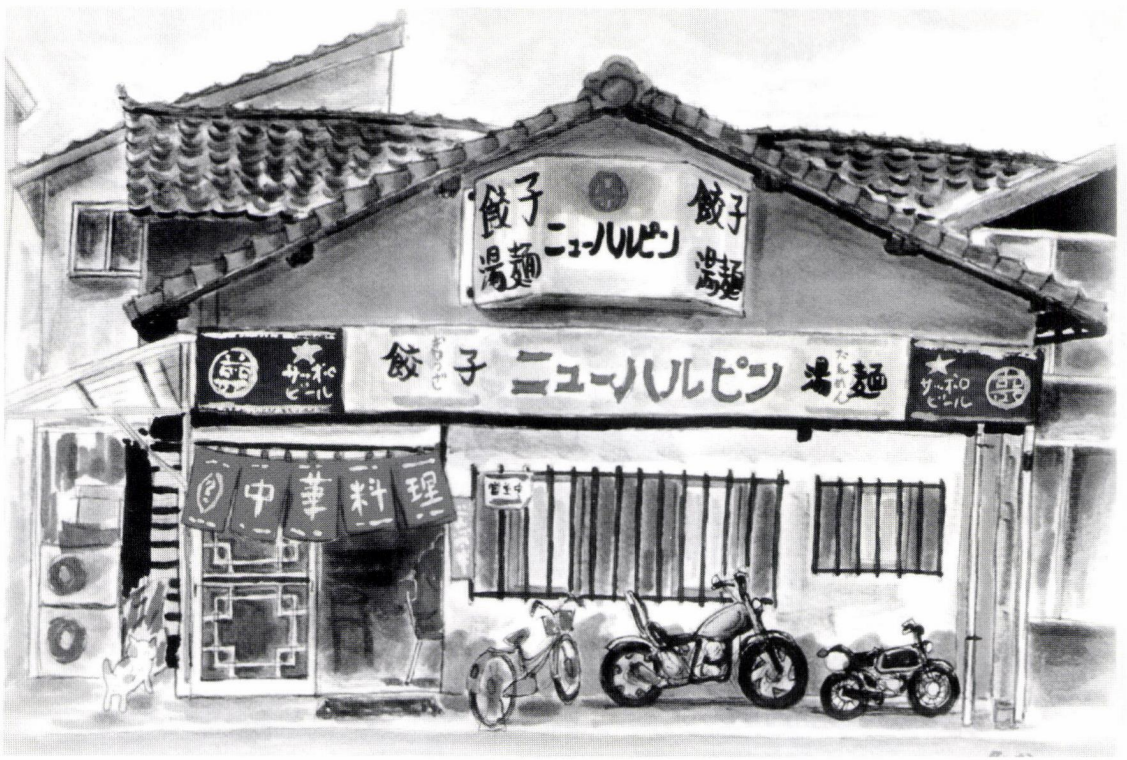
歴史は「今日」への手紙

◉

直江津水道発祥の地 水源公園

わたしの直江津とは

ひぐちきみよ



10年以上も前のこと、直江津の友達と関川沿いの空き家を見に行って、帰りにニューハルピンのラーメンを食べた。

小雨が降ったり止んだりの昼下がり。店を出て、振り返ったハルピンは哀愁と温もりと投げやりがないまぜになった何とも味のある佇まいだった。

高田の大町にあった屋根裏の仕事部屋に帰って、夢中になって書き上げた。

あれは確かに、恋心だった。



初めていった祇園祭で心に焼き付いたのが、花火に彩られた高張提灯。

高張なんて言葉も知らなかった。直江津の誰かに聞いたんだ。

ゆらゆらわらわらと集まって、みこしの帰還を夜空にくっきりと見守る。

毎年のことだけれど、高張提灯の景色は年ごとに違う。

「おらたちの見せ場だすけ！」と提灯はドヤ顔。

ほれてまうやろ。



ひぐちきみよさん

昭和33年生まれ。生粋の東京生まれ東京育ち。

CMプロダクションなどを経てイラストレーターに。

縁あって、20年数年前に上越へ移住。

以来、上越地域をイラストで描くうちに、祇園祭に魅せられて直江津へ移住。失われたまちの風景や祇園祭を「きみよワールド」の絵はがきにして、毎年、7月と12月に直江津絵はがき展を開いている。

特集

「北前船」のまちを巡る



北陸には「北前船まち」あるいは「北前船の家」が観光地化され訪れる人たちが増加している。

今回、まちおこし直江津では、富山県の北前船で栄えた三つの地域の歴史と今を見るべく巡り、そこから、かつての北前船の寄港地として、また近代港湾の直江津の姿を探り、直江津の地域再生の糸口を探ってみた。

写真、海に四角く突出している部分は伏木港万葉埠頭。その上の河口は小矢部川に開かれた伏木港、庄川河口から左手の海岸の港が新湊。写真最上部の内陸に掘り込まれて部分が放生津潟を開いた富山新港。その先が岩瀬。

（写真は富山市港湾局ホームページより）

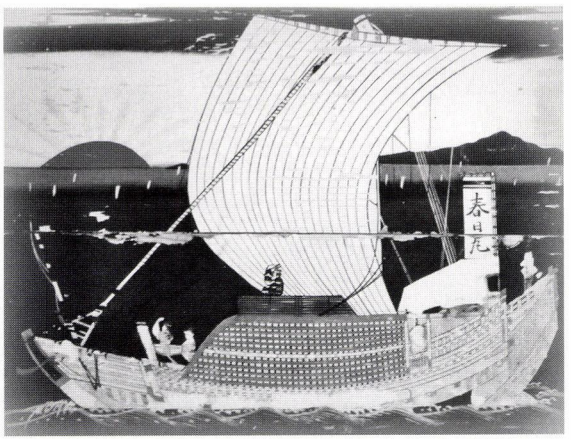
伏木

高岡市

越中国府の港として開かれたところところで、「古国府（ふるこく）」という地名が残り、勝興寺（国重要文化財）周辺が越中国府と推定されている。万葉歌人大伴家持が国司として赴任したため、二上山の中腹に万葉文化の広場など「万葉集」にかかわるスポットも多い。

伏木港は現在、富山湾の富山港・新湊港・伏木港を総称する伏木富山港に含まれているが、小矢部川河口に位置し、江戸時代は北前船の寄港地として栄えている。

北前船の繁栄を思わせる屋敷と近代洋風建築が混在する街並みは、今は静かなたたずまいを見せているが、商工業地の高岡を背景に海運業や製紙工場などの工業も盛んである。また、万葉埠頭には十五万トンクラスのクルーズ船の寄港地にもなっている。





高岡商工会議所伏木支所
明治43年、伏木銀行として建築された土蔵造り2階建ての擬洋風建築。建築当時は黒漆喰塗りであった。



そこかしこに古い商家の建物と大正から昭和にかけた洋風の意匠を凝らしたモルタル塗りのモダンな建物も残る。

昭和五年に出された『上越座談会集・おらが在所』という本を見ると、開通したばかりの上越本線の直江津への影響をテーマにしたなかで、当時、直江津廻船問屋組合長で県会議員であった古川長四郎は林圭助町長の質問に、直江津は不良港だったにもかかわらず比較的成績が良かったのは貨車回りが良かったからだが、深刻なのは、伏木、新潟港が日を追って発展している。直江津港はシケと雪と荷役賃が高いので、むしろこちらが問題であると答えている。

たしかに、急行で信越本線の一一時間に対して上越本線の七時間は、四時間も短縮になっているが、古川長四郎が指摘する通り、伏木港は北陸本線が明治三二年に富山まで開通（全通・大正二年）すると、良好な河口港である伏木は、関西方面への北海道の物産の交易港として飛躍的に発展している。直江津ではあまり意識していなかったようだが、伏木は直江津港をライバル視していたようである。

伏木北前船資料館
旧秋山家　国指定登録有形文化財

秋山家は文化年間から海運業を営んでいた。土蔵は江戸時代の物とされるが、主屋は明治二〇年の大火で焼失後、元通りに立て直されたと伝えられる。

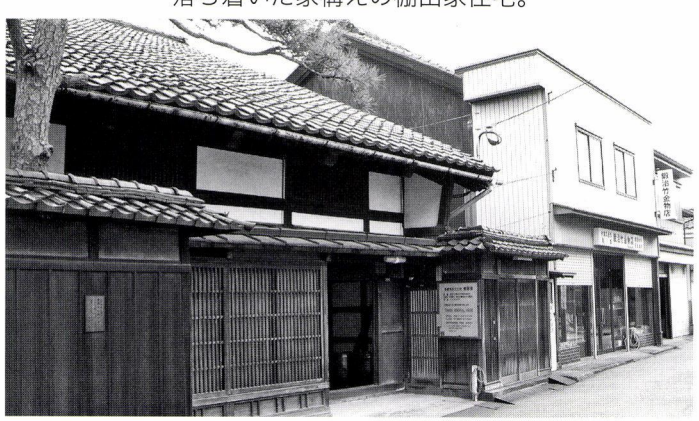
土蔵の屋上に船の出入りを見張る珍しい望楼があり見学できる。

豪商の建物として見るべきところも多いが、全国の取引先から年始の印しとして贈られた「引き札」には、直江津からの物も展示されている。

棚田家　国指定登録有形文化財

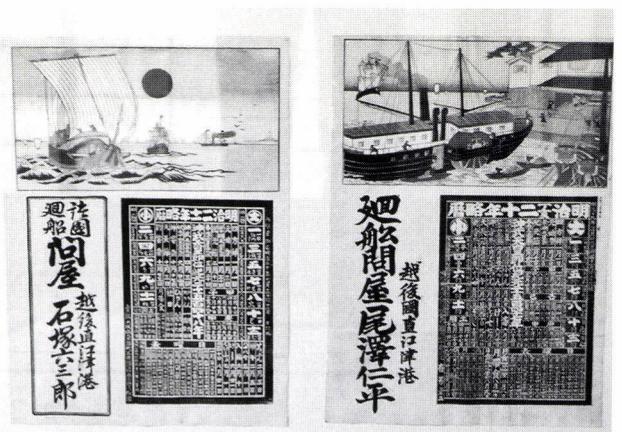
明治二〇年の大火後、再建されたものであるが二階建ての近代和風建築として貴重なものである。

落ち着いた家構えの棚田家住宅。

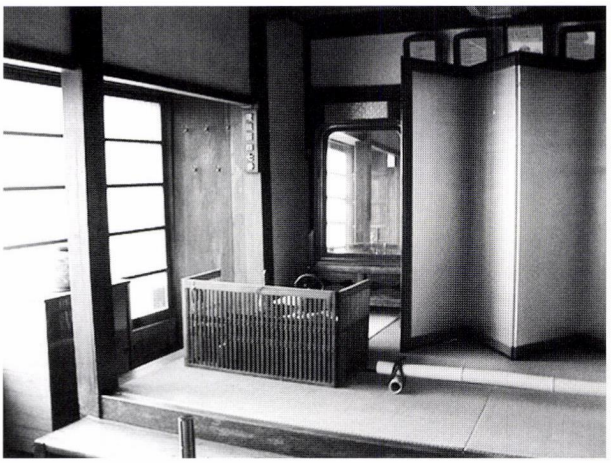


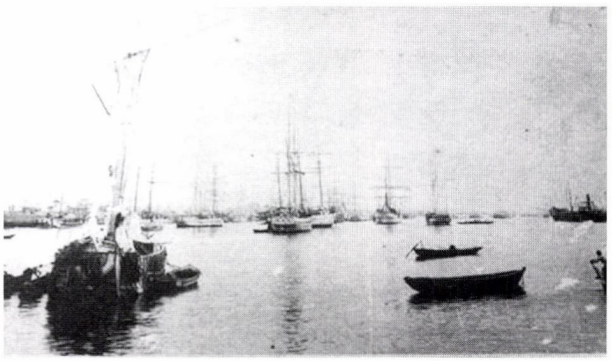


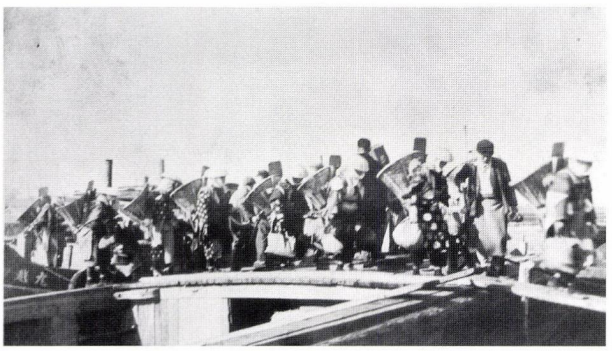




上　伏木北前船資料館　旧秋山家。
　　屋上に望楼が見える。
中　望楼から伏木のまちを望む。
下　直江津の廻船問屋から送られた引き札。
　　尾澤仁平、石塚六三郎の名がみえる。







上　重厚な棚田家の店先。
中　大正時代の絵はがきに見える洋風帆船と千石船が混在する伏木港。
下　棚田家に飾られた写真。仕事帰りの女子衆がタガラを背負っている。

敷地内には、茶室がある母屋、道具蔵、衣装蔵、味噌蔵が並び、それらは吟味された材がふんだんに使われ、部屋ごとのしつらいの贅は尽くした物であり、繁栄の時代をしのばせるものがある。

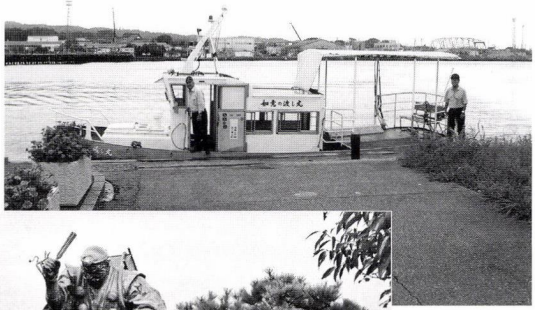
その一方で、「店」は商家らしい質実剛健なつくりになっている。

如意の渡し

源義経の一代記「義経記」によれば、弁慶が義経を打擲する場面は、この如意の渡しの渡し船の船頭との間で起きている。

歌舞伎「勧進帳」の場面は、この如意の渡しと直江津の観音寺での場面「直江の津にて笈探されしこと」の両者が、石川県の安宅に置き換えている。

対岸の新湊へ渡し船が通っていたが、伏木万葉大橋が架かり、残念ながら廃止された。



かつては渡し船もあった。



如意の渡の義経・弁慶像。

新湊・放生津

射水市

平成の合併で射水市になったが、古くから新湊市として親しまれてきたまちである。

中世には放生津湊として栄え、江戸時代になると北前船の寄港地として栄えている。

古刹が多いのも特徴の一つで、中世から続く放生津の寺院群から越後府中の姿を検証する研究者もいるほどである。

まちを貫流する内川は、かつての放生津潟と結ぶ運河で、現在は定置網の船が係留され、両岸の古い町並みをつなぐ、一二本の特徴ある橋が架かり、橋めぐりをする人たちも増えている。

近年は映画の舞台にもなっていて、新幹線を利用した「聖地巡礼」ツアーも組まれ、射水市のふるさと納税のCMでも映画の舞台の地をアピールしている。



新湊曳山祭り。
四十物町の山も見える。

あなたへ　高倉健・田中裕子
RAILWAYS　三浦友和・余貴美子
脳男　生田斗真・松雪泰子
人生の約束　竹内豊・江口洋介
などがある。



内川に係留される漁船。屋根付きの橋も見える。

これらの映画にしばしば登場するのが、一〇月一日に行われる放生津八幡の祭り「曳山祭り」である。

昼は花山、夜は提灯山と変わる北陸の曳山の一つ。日ごろ静かなまちが一変する曳山祭りは、放生津の人々の底力を物語るものと言える。

漁民義人塚

新湊は四十物という町名があるほどであるが、鮮魚を集荷して商う「五十集屋（いさばや）」という魚商人も多く、江戸時

代、加賀金沢城下や高岡へ出荷する鮮魚の魚問屋を置き、放生津（新湊）には六軒問屋という特権的商人が生まれた。漁師に前渡金を貸し付けて漁獲を独占し、一割の口銭を取って売りさばいていた。

享保一（一七一六）年、は不漁で不作で、加えて六軒問屋は役人にわいろを贈る一方で、漁民には支払代金の遅延など、横暴な振る舞いに、漁師たちはバンドリ（刺子の半纏）姿のまま、金沢の公事場（くじば）奉行所に直訴。

奉行所は六軒問屋の罪を認めたものの、直訴の首謀者佐賀野屋九右衛門と嵐屋四郎兵衛を死罪にした。藩主はこの事実を知り、奉行を免職にし、首謀者二人を無罪にする使者を差し向けたが、時すでに遅く斬首の後であった。

事件は、こののち放生津漁場を設けて、六軒問屋への借金対策を講じて八年で完済し、残金は漁や海難の支援、資金に充てることになった。人びとは二人を「世直し義人」として漁民義人塚を建てて篤く祀り、今に伝えられ、お盆には慰霊法要が営まれている。

平成一八年「未来に残したい漁業村民の歴史遺産一〇〇選」（水産庁）に選定されている。





上　漁民義人塚。
下　放生津八幡。社殿の裏が「奈呉の浦」。

放生津八幡

越中国司として赴任した大伴家持が、

あゆの風　いたく吹くらし
　奈呉の海人の釣りする小舟こぎ隠れみゆ

と詠ったって愛し、この辺りは奈呉の浜と言われるようになり、宇佐八幡を勧請して放生会が行われたことから放生津と称されるようになった。

直江津の雅称「奈古の浦」や「あゆのかぜ」（あいのかぜ）など、直江津とどのようにつながっているかはわからないが、『直江津町史』によれば、「夫木集」の和泉式

部の歌、

いそぎしも越路の名呉のつぎ橋も
あやなく我は嘆きわたらん

を引用して両者の地名の相違を論じているが、文明一七（一四八五）年に越後府中を訪れている歌人堯恵が、越後府中へ入ったその日のことを

その夜、奈古というところに着す。楓橋の夜の泊りもやと思いつらねはべりて、

曙や夢は　とだえし波の上に
奈古の継橋残るとぞ見ゆ

という「北国紀行」一節と歌も示して、直江津における「奈古」について論じている。

社殿は長尾為景の兵火にかかり消失、神保氏によって再建されている。

岩瀬　富山市

室町時代に成立したとされる「廻船式目」の三津七湊にもその名が現れる古い港で、江戸時代の北前船の寄港地として、また明治に至っても「五大家」と称される有力商家を中心に回漕業などで栄えてきたが、時代の波には勝てず衰退の一途をたどり、北国街道に面して廻船問屋が立ち並んでいた面影も薄れていった。

「五大家」の一つ森家が昭和六〇年代に富山市に寄贈され一般公開も始まったが、観光客を取り込むほどの効果はなかった。その岩瀬が脚光を浴びるきっかけになった一つに、富山ライトレールがある。

富山駅と岩瀬浜を結ぶＪＲ富山港線は、富山港の貨物輸送や産業の動脈路線であったが、工場の撤退や車社会による乗客数が激減し、赤字路線化していった。

ちょうどそのころ北陸新幹線富山駅の高架工事が始まり、それに伴い、富山港線も高架化が必要になった。しかし長期間の運休と工事のコストを理由に廃線が決まった。

このなかでヨーロッパの都市を走るライトレール（ＬＲＴ）に着目し、岩瀬の再生は廃線が決まった富山港線をライトレールとして再生させるべき、と岩瀬地区の有志が富山市に働きかけて第三セクター会社を設立、全長八キロのうち高架工事予定区間一・五キロを廃止し富山駅北口に路線を切り替えて路面電車区間とし、全路線低床化することになった。

始発駅の「富山駅北」を発車すると、しばらく市街地の路面区間を走り、ホームをすべて低床化した旧富山港線に入って岩瀬浜を目指す。従来の五駅から一三駅に増





上　森家の茶の間。
下　北前船がおかれたポケットパーク。

設したため、間隔が六〇〇メートル以内になり、一〇〜一五分間隔で電車を運行することと、終電が遅くなったため利便性が向上して乗客数が増加し、ヨーロッパ風の車両も人気の的になり、岩瀬への観光が増加することになった。

ライトレールの整備の間に、歴史的地域資産を残し活かしていこうと「岩瀬まちづくり会社」が設立され、会社で空き家を買い取ったり、あるいは借り受けて、技術の伝承も含めて若い職人を集めて修復・修景の作業を行っている。そこに厳選した蕎麦屋などを誘致する一方、力のある若い芸術家に生活の場と創作の場として提供している。

今、岩瀬のまちが魅力的な散策の場になっているのは、各地にみられる「古い町並みと古民家を再生」したと言いながら、じつは「土産物屋」のまちづくりに陥らない、まちづくりへのコンセプトが明確に示されていることである。

江戸川大学鈴木教授によれば、このような岩瀬のまちの再生は、まちづくり会社の人々のまちへの思い（愛）が明確であり、そのことが地域での信用と信頼を勝ち得ているからだと指摘している。

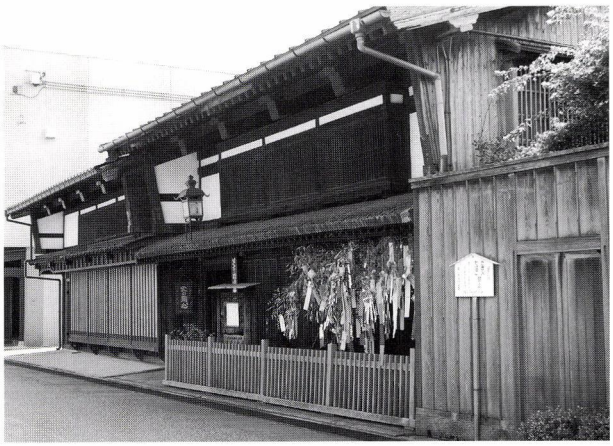
北前船廻船問屋の森家　国指定重要文化財

岩瀬は神通川の河口港であり、また北国街道が通る宿場町としてもさかえたところであるが、森家は代々「四十物屋」を屋号にし、江戸末期から明治にかけて北前船の廻船問屋として栄えた家である。

建物は明治初年に建てられたといわれているが、豪商の家らしい構えと、全国各地から集められた木材や石なども見もの。土蔵の戸前には小杉左官の見事な鏝絵が施されているのも見ものである。



岩瀬浜で富山ライトレールに乗り込む観光客。





上　「うだつ」のあがる森家。
下　森家の隣に建つ田中家。高等女学校の設立資金全額を出した豪商。
　　建物は富山市に移管される予定。

巡り終えて

今回巡った伏木・新湊・岩瀬は、万葉大橋や新湊大橋の話題性に富んだ橋と海岸道路で結ばれて回遊効果が生まれ、新湊の「きっときと市場」の昼セリ見学や海鮮食事などと組み合わせて、旅行者のほうが先行して一つのパッケージとしてとらえて訪れる人が増えている。

これらのことは、直接あるいは具体的に直江津のまちおこしにつながるものが提示されているわけではないが、三つの地域の根底に流れる「まちへの思い」は、地域再生の基本理念を示すもので、見逃せないものがあると感じた。



白エビ料理の老舗名店。明治、岩瀬の繁栄を物語る。



昆布巻きや棒鱈を売る店。まちの風景に溶け込んで違和感を与えない。



火災から守る土蔵造りの寺。

まちおこし直江津とは

平成二四年に発足した地域活動団体。様々な文化活動を通して、直江津のまち活性化に取り組んでいる。

「なおえつ物語」のかたち編とものがたり編を刊行し、直江津地区の小中学校の地域学習の手引きとして配布。

五智国分寺に忘れ去られていた今町の狂歌師千代垣直の墓碑の復興、説経浄瑠璃の公演やみんなの地域学習というタイトルのもと講演会も行っている。



特集・巡検記録「北前船のまちを巡る」文中の『おらが在所』は、昭和五年に「東京日日新聞」（毎日新聞）高田通信所の主催で、当時の高田・中頸・東頸・西頸の一市三郡の名士による座談会を開催し、「新潟版」に連載されたものである。連載中から大変好評で、上越座談会集刊行会によって『おらが在所』として刊行された。題字は史跡探訪のために訪れていた徳富蘇峰の手になる。

一七名の出席で行われた座談会は、八〇年も前の話であるが、いまだに変わらぬ問題を提示して、示唆に富んだ内容になっている。

「直江津振興座談会」と題する中から一部抜粋して紹介する。旧漢字旧かなは現代文に改めている。

■出席者（一部）

司会・渡辺善房　東日高田通信所主任
林　圭助　直江津町長
古川長四郎　直江津廻船問屋組合長・新潟県会議員
眞保善五郎　大成水産会社専務
田中石太郎　直江津漁業協同組合理事
松村陸三郎　直江津駅長
月橋　正樹　直江津尋常高等小学校校長
中戸　賢亮　直江津青年会幹事長・真行寺
上原　慶三　直江津町教育会長
片田　温一　舞踊研究家

上越線開通と直江津地方

司会　まず第一に当面の問題として上越線開通後の直江津地方はどんな影響を受けますでしょうか。

林　上越線開通に対して新潟及び直江津から分岐する宮内までの距離に大差なければ、貨物運転の関係は直江津商人の努力如何によって影響はありますまい。

林　これについては専門家の話を聞きたいと思います。

古川　そう影響は無いと言えましょうが、ただ貨物旅客の通過が少なくなり、列車の運転減で不便になるというのは困ります。従来、直江津は不良港だったにもかかわらず比較的成績のよかったのは貨物回りが良かったからです。旅客貨物が減るとしたら、数字的にはわかりませんが困ることになりはしないかと思います。

しかし、高田・直江津両商工会議所で共同請願した名古屋直江津間の直通列車が出来れば幾分かは緩和されるでしょう。直江津としてはもっと深刻な脅威はほかにあります。すなわち、伏木、新潟港が日を追って発展していくことです。直江津港はシケと雪と荷役運賃が高かったりして、この両港に押されてきて上越線の開通に神経をとがらすよりも、むしろ重大問題だと思います。

※聚楽＝合宿の意

眞保　かえっていい結果を生みだしはしないかと思います。直江津の漁業はもとから沿岸漁獲を主とせず、他の地方の品物を直江津から小口にして出す方が多かったのです。したがって上越線が出来ればかえってそれだけ便利になるわけで、現在直江津に一車（貨車一両）おろされた魚を三日かかって消化したものが、一日で消化できるといった具合になると思います。沿岸で獲れる魚もその通りで、かえって漁業界は好転すると思います。

田中　眞保さんのお話のように販路拡張となって、かえっていいでしょう。

司会　駅長さんは如何ですか、駅の立場からは。

村松　操事場が長岡に移る関係から駅員が三十人程減る。これなどは小さい問題で、実際的に直江津に対する影響は的確には判りませんが、新潟上野間の急行は上越線に移ってこちらの方は一往復減ると思う。しかし輸送力は減らぬ見込みです、今日は、列車のサーヴィスという事がやかましくいわれていますから、回数の減るようなことはなく車両が減るだけで、不便などないと思います。むしろ上越線の開通によって直江津町民には販路拡張の好機が恵まれるわけだから、ひと奮発の試金石として期待したいと思います。

中戸　私も駅長さんと同じ意見で、如何にして多くの人々を直江津に引きつけるかについて何等か策を樹てたらと思います。

月橋　それについてはこういう話があります。埼玉県の校長さんが、生徒ら休暇聚楽（しゅうらく）を行うため東海道方面から三浦半島、房総まで海岸をくまなく探したが適当の地がなかった。そこで探し探し裏日本まで来た時に、直江津を見て始めて人情に厚く海岸も教育に差支えないというので、女学校を借り聚楽に来たいと言って来ました。

　実際、五智・直江津の海岸は歴史的にも人情風俗からいっても休暇聚楽の適地だと思います。上越線などが出来て交通がよくなればなるだけ、教育地の直汀津として人寄せに努力したい。実際、千葉・茨城地方の海岸は悪影響こそあれ、よい影響は決してありません。この点から見て封策を考えたいものです。

古川　それは非常に結構なことです。私個人の考えとしては、もう一つ人を集める方法として、佐渡を自分達、直江津人のものと考えて佐渡を利用して人集めをやったら非常にいいと思います。

　この間も回遊切符が売り出されたが、これなども直江津が、佐渡を利用するにはもってこいで、新潟などでは、早くからこの点に着眼して、宣伝大いに努めています。直江津でも、ひとつ大馬力をかけ、多くの都会人を集め得るこが出来る様にしたら、直江津町も更生の火が点じられるのではないかと考えています。

松村　上越線が出来て東京と新潟が近くなれば、直江津が印象のよい土地として（東京に）知られていない以上は、新潟方面へ多くの客を取られるのは覚悟していなければなりません。

　これは田口（妙高高原）、赤倉などの温泉地とも連絡をとって、とにかく信越線に足を向けさせる様にしたうえ、もう一段進んで信越線の各所で是非足を止める様な場所を多く作りたいと思います。佐渡だけを利用しようとすれば、どうしても新潟に客を

とられ勝ちになるでしょう。結局、佐渡と妙高山麓一帯と直江津とが大同団結して客の吸収に大猛進する必要があるということになりますね。

林　港は御承知の通り五十五万円の工費を出して大規模ではありませんが、現在の直江津にしては不便のない程度のもの出来るはずです。それ以上のものにするには大奮発が必要です。しかし、分不相応な立派なものが出来たといっても利用の途がなければ宝の持ち腐れになりますから、名所旧跡の宣伝のみならず産業方面の開発も肝要です。産業方面に飛躍したならば港はむしろ自然に大きくなると思います。

古川　直江津港は昔から有名な港で、その点大いに誇りとしてきました。ところが最近は次第に港としての直江津が忘れて行きつつあります。これは直江津の人自身が悪いのではないかと思っています。直江津全体が港を見くびっている形があると思います。

　水深が浅いとか川幅が狭とか、あまりに消極的で、甚しきに至つては北海道と信州を繋ぐに最もよかった直江津港が、鉄道網の完成で価値が無くなったとさえ極論する人がある位です。しかし直江津港は、通過貨物だけの港ではないのですから、商工業地として躍進するという理想に向って進むならば、熱もかかって来るだろうと思います。衰微の時代にはことさら一段の飛躍を要するわけで、全町民の一致協力が無くてはならないと思います。

五智も直江津地内と見て

司会　何かほかに名高い旧跡と言った様なものは御座いませんでしょうか。

中戸　直江津としてはこんなもの（前項で直江津の名所、伝説などを語っている）でしょうが、どうしても五智も直江津の一部として考えたいですね。五智を中心としての名所旧跡は施設さえ完全にしたならば京都、奈良に次ぐ日本第三位の古跡に座りうると思います。あそこは大国主命の宮居（みやい）の跡であり、親鸞聖人の流罪の地であり、数え上げれば旧跡がたくさんあります。

上原　五智の居多神社は越後一の宮で弥彦神社でさえ社領わずか一千石だったのに、足利時代の書物には居多神社の社領三万石とあり古文書も残っています。たしか書類（文書）を写真に撮って内務省神社局へ十二、三枚も送った事があるそうです。当然、国幣中社の資格はあるのです。今では県社でしかないのですがね。

田中　金さえあれば昇格運動がうまく行くのですがね。

中戸　五智の旧跡は実際たいしたものですよ、居多神社のほかに親鸞聖人が五ケ年間配所の月を眺めた国分寺があります。一条六尺の大仏坐像五体の揃ったのなど他にありません。長野の善光寺、佐渡を始め速く金沢方面まで連絡をとり、名所旧跡地帯として天下に宣伝したら、実に申し分ないでしょう。直江津としては是非ここに力を入れねばならぬと思います。

司会　五智に停車場ができるという話ではありませんか。

村松　風評ですから責任ある答えはできませんですね。

古川　ずいぶん前からの話です。

ヤキカマボコは天下一品

渡辺　最後に直江津の名物について天下に誇り得るものについてお話願いたいと思います。

中戸　焼かまぼこはどうです。あれはいいと思いますがね。鰈を搗いて作るのですが五、六月頃が最盛期です。

片田　確かにあれはよその土地へ土産にしたらいいですね。

田中　昔は「お鉄かまぼこ」と言ったものです。お鉄という婆さんが片原町にいて、こしらえたのが始まりでした。

片田　たしか一本一〇銭ですね。

中戸　あれ停車場で名物として売ったらきっといいでしょう。値段も安いですし。

田中　百年も前に出来たもので、現在の人はもう七十歳くらいの人で小川六兵衛といいますが、お鉄婆さんの跡を継いでこしらえています。

中戸　「あら波」（新潟製菓で売り出したせんべい）もいいにはいいですが、同種類のものがほかにもありますからね。そこへ行くと焼かまぼこなどはお使いものにしても、ちょっと変わっていますし、食べて非常にうまいものです。

月橋　県教育代議員会が直江津で開かれた時、宴会にきんとんや羊羹の様なものは要らないから、あれを出してもらったら、とても評判がよかったことがあります。

中戸　うまくやったらきっと名物になります。

月橋　何か芸術味のあるものが欲しいですね。

村松　五智人形もいいじゃありませんか。

月橋　上杉謙信公の坐像や琵琶法師の坐像がありますね。木のものもいいが土で造ったのもいいですね。

片田　佐渡で名物にしている首人形（のろま人形）の様なものを造ったらいいと思っています。

中戸　そうですね、何か歴史的有名な人物をとらえて、例えば厨子王や安寿姫の首、あるいは上杉謙信公などというのを……。

月橋　うん、そりゃ面白い思いつきだ。一つ学校で作らせて見ましょう。秋の展覧会までに。

片田　それを名物に宣伝したらきっと、いいと思います。

　直江津の歴史紹介にもなりますから。

古川　直江津に関係ある歴史的に有名な人の首をみんな作ればいいでしょう。

以下次号に続く



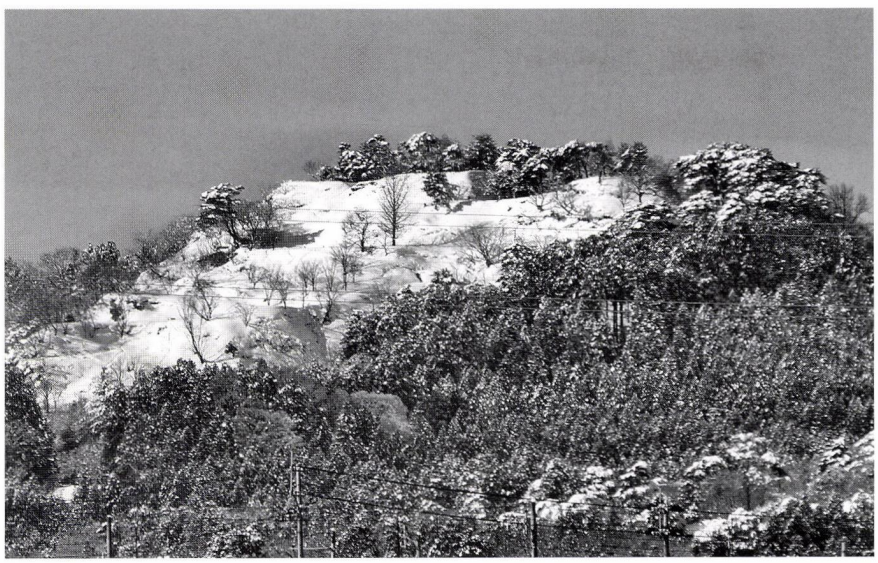
五智人形

国府―春日山―府中―直江津の空間を駆ける

春日山城と越後府中 3

―平成二八年七月二七日の春日山城―

小島幸雄



雪の春日山城跡　平成28年2月撮影

四〇年で一番悲しかった日

今年の七月二七日八時ころ、山麓線の加賀町を走行中だった私の携帯呼び出し音が鳴った。車を寄せて発信者を確認する。中西文化行政課長からだ。「えっ、朝からなんだろう?」と思って電話に出た。

「どうしましたか?」

「但馬谷で土砂崩落が発生しました！　すぐ向かってくれますか?」

「近くなのですぐ向かいます」

謙信公銅像前に車を止めて見た但馬谷の姿は、四〇年春日山に通ってきた私にとって、一番悲しい光景だった。平成二八年七月二七日、この日を一生忘れることはないだろう。

土砂は市道を乗り越えて謙信公銅像前の売店裏の沢にまで達し、発生直後は「なんてことが起こったのだ」とわが目を疑った。

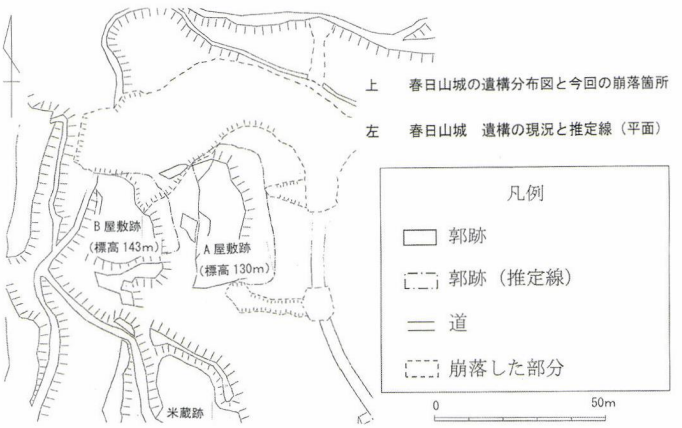
山城は、春日山城に限らず人の手によって地形が改変されて形成されたものである。春日山城は慶長一二年（一六〇七）の廃城後四〇〇余年の星霜を経て形は微妙

に変化していることはわかっていた。特に、春日山城の二の郭から米蔵にかけては緩斜面で、山城としては異様な傾斜であることを常々指摘してきた。この答えが今回の崩落で明らかとなったので、後で詳述する。

山城が築かれている土地はさまざまで、大きくは石山と土山に分けられる。春日山城は、後者の土山に属しているため、今回のような崩落が発生したのだろう。

筆者は、本紙三六・三七号で「春日山城と越後府中―春日山城跡史跡指定八〇年によせて―」として、官民問わずに春日山城へのこれまでの取り組み、そして将来構想を述べた。ここでは、但馬谷の土砂崩落から考えられることがらを提示して、史跡指定八一年目以降の春日山城の保全について考えることとする。





上　春日山城の遺構分布図と今回の崩落箇所
左　春日山城　遺構の現況と推定線（平面）

図1



中央が崩れた但馬谷

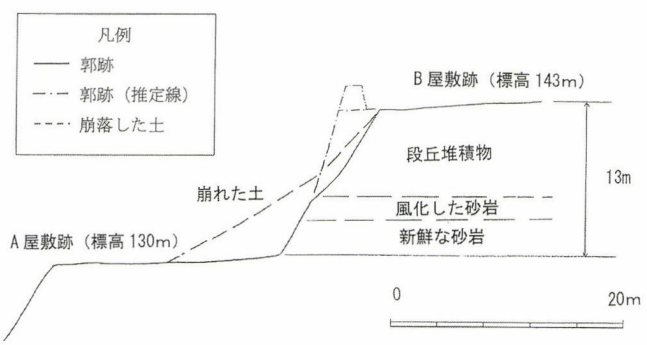


図2

平成一七年度の現況測量

春日山城は、将来にわたって地形が変容することが無いと保障されているわけではない。というよりも、地形が変化していくことを予想すべきであるため、市では将来の遺構確認と修復を容易にするため、平成一〇年代後半に現在の形状と遺構の平坦地の位置を測量した。まだまだスギ林が多く残っていたことから、遺構の平坦地の範囲や微妙な地形の変化が見えない部分もあったが、遺構の形は概観できるものであった（図1）。

この時に作成した平面図が、今回の但馬谷の土砂崩落のメカニズムを我々に教えてくれた。

結論から述べると、遺構が崩れたのではなかったのだ。平面図を作成した当時の遺構は、ほぼ残っていたという

のが地形図と今回の崩落部分の測量図の合成によって判明したのだ。では、どうしてあのような土砂崩落が発生したかというと、四〇〇余年の星霜を経て、ポロポロ（？）ボロボロ（？）、つまり雨や風雪によって少しずつ流れ出した土が但馬谷の沢に溜まり大きな盛土のようになっていったと考えられる。そのたまった盛土は、春日山城を形成する基盤層である砂岩といった層の上に堆積したものだから、基盤層とは融合しない性質を持っていた。馴染まないのである。基盤層の上にたまった崩落土は次第に大きくなり、小さな崩落を繰り返しながらさらに増大していったのであろう。

前述のように、春日山に限らず山城は山を削って作っている。ましてや、春日山城の基盤は砂岩である。城を造ったときはその砂岩を削っていたことになり、もともとはその砂岩が露出していたわけである。崩落土は、基盤層の砂岩の上に堆積していったわけであった。

土砂が滑った原因は、基盤層と馴染まない崩落して堆積した土と基盤層の間に想像を超える水が流れ込み、崩落土が基盤層の上を滑った、ということが推測されるのである。今回の集中豪雨は上越地域の観測史上最大の二四時間雨量が二四二・五㎜に達していたとされ、多量の水が基盤層と崩落土の間に溜まり、土砂を滑らす膜のようなものとして作用したのであろう。

郭の造作方法

なぜ、このような崩落土が溜まったのか、郭の造り方から探ってみよう。

春日山城の基盤層は、砂岩であることは前述のとおりである。春日山に城を築く際、郭の造作には山を削る必要が生じる。郭を造っていくわけだから、尾根を利用して必要な平坦面を確保して、土塁を積みあげて完成させたと考えられる。

ここで、今回の崩落を起こしたメカニズムのヒントがある。石山だと平坦を造りだす時に大量の岩石が発生する。この大量の岩石は処理しなければならない。これらの大量の岩石を斜面に作ったステップに積み上げれば、石垣が積まれたことになるのだ。一石二鳥とはこのことで、厄介者の石を石垣として利用し、さらに大きな屋敷が造成できたのである。よく知られている「天空の城・竹田城」がそれをよく示しているので写真や現地で見られた方も多いだろう。

ところが、前述のように土山に造られた春日山城は、石垣を積もうにも原料となる石が工事現場で発生しないのだ。したがって、もともとあった斜面に土を張り付けて急崖を造り、その上を平坦化して屋敷を造成しなければならなかった。傾斜が緩やかで長く続く尾根ならば、屋敷は細長く長方形や楕円形になったとしても屋敷の造成には大きな影響はない。しかし、傾斜が急な尾根になるといくら削り出しても、削った部分の標高の高い方が急斜面になるだけで、十分な平坦を造ることは困難である。これが、今回の崩落のメカニズムなのだ（図2）。

同じ春日山で比較してみよう。

今回の土砂崩落が発生した但馬谷をはさんで、北には直江屋敷跡がある。直江屋敷は千貫門跡の急崖まで三段の屋敷跡で形成されているが、それぞれの段差は二m程度で、全く崩壊した形跡がない。強いてあげるならば、NHK大河ドラマ「天地人」が放映された時に押し寄せた観光客が、遊歩道から逸脱して道を造ってしまったことくらいであろう。五〇度以上の急崖であるので直登は

難しかったようで、斜めに道が付いてしまっていた。したがって直江屋敷の土砂崩落は知らない。そして、直江屋敷の標高を平面図から求めたところ、水平距離が一〇〇mで標高差が約七mということであった。したがって、角度にすると約五度の傾斜だったということになる。ほとんど平坦だったといっても過言ではない。

ところが、今回崩落した遺構の標高を比較したところ、市道の直ぐ上の遺構の標高が一三〇m、そして次の遺構が一四三m、さらに上の毘沙門堂のすぐ下の郭は一五七mという数値だった。遺構と遺構の標高差は、直江屋敷と比較にならないもので、これら三段の屋敷が造られた尾根は極めて急斜面であったことが分かったのである。ちなみに、現在みられる遺構面の標高と水平距離を平面図から求めた数値は水平距離が六〇mで二七m標高があがっているので、単純に計算しても二五度以上傾斜した尾根であったことが推測できたのである。

このように見てくると、斜面崩壊が見られない直江屋敷の遺構の斜面と但馬谷をはさんで南に位置する屋敷群は、五度と二五度という傾斜角に五倍の差があるところで造られていたことになる。これまでは急な斜面に造られた屋敷跡程度に考えていたが、今回の災害はこんなことまで教えてくれているのである。

但馬谷と屋敷の造成

写真を見ていただこう。謙信公銅像横から撮影されたものである。本誌三七号でも紹介している写真だが、撮影場所は春日山城の馬場があったとされる地点でもある。前項で数値を上げたように但馬谷に面した遺構の標高差は一三〜一四mもある。マンションの高さにすると、おおむね四〜五階に相当するそうである。敵が馬場まで攻めあがってきたとして、そこで目にするのは五階建てのマンションに相当する急崖なのである。戦意を喪失させるにはまことにふさわしい城の普請といえるものである。ましてや、その崖の最上部には土塁と塀が築かれていたであろうからもう一階分高かったことになり、その威容は想像に難くない（右下の写真）。

ところで、但馬谷の屋敷を遠望できたと考えられる場所がある。大手道の入り口である。二一ページ上の写真は大正四年に刊行された図書に掲載されたものであるが、わずかに但馬谷を遠望できる。そうすると、大手にたどり着いた敵ははるか上方に四〜五階建てのマンションの壁を遠望したことになり、演出効果抜群の屋敷形成であったと推察される。



上　杉伐採前の春日山城
下　謙信公銅像横から見る但馬谷

土塁が少ない？

山城は、屋敷の周りに巡らされた土塁と尾根筋を分断するように随所に掘られた堀切によって守られている、などと書かれていることが多い。筆者も上越市に採用された当初はそれを何の疑いもなく信じていた。ところが、春日山城に通いながら、ある時点からこの城は土塁が少ないのではないだろうか？　と、思うようになった。

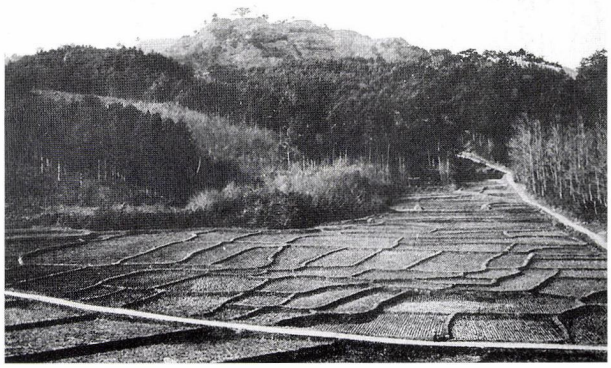
春日山城の土塁の代表格は、米蔵跡にL字状に造られたもので、連続する景虎屋敷には土塁を見ることができない。米蔵と景虎屋敷の間には三の丸があり、とても米蔵だけに土塁を築いていたとは思えないのだ。ただし、景虎屋敷だからあったはずだというのではない。

春日山城跡に建つ屋敷の名は、江戸時代から明治にかけて描かれた絵図からとっている。屋敷の名称は春日山城が廃城になって約九〇年も経って初めて絵図が描かれ、明治初年まで描かれてきた。最古の絵図は、元禄七年（一六九四）であるから既に屋敷の名称も推測の部分が多かったであろうことが想定され、事実現存する絵図を比較しても、複数の絵図で同じ名称が記されている屋敷は極めて希なことが知られている。もう、誰の屋敷かわからなくなってから書かれたのであろう。先ほど紹介した馬場は、複数の絵図で同じ名称が使われている数少ない屋敷の一つである。

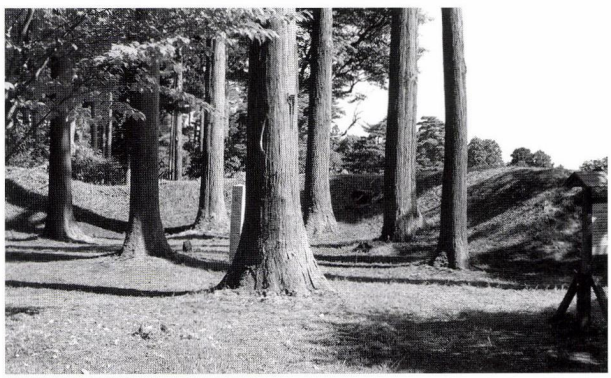
米蔵以外の屋敷の土塁で顕著にみられるのは、南三の丸屋敷の虎口、同じ南三の丸の正善寺口の虎口、それに景勝屋敷から桑取道に抜ける遺構群にある連続する三か所の土塁と堀切である。

なぜ、土塁が少ないか考えてみよう。

今回の崩落は斜面に積まれた土が四〇〇年の星霜を経て崩落していたものが流失したことは前述した。そのメカニズムも図示した。それをあわせて考えると、斜面を



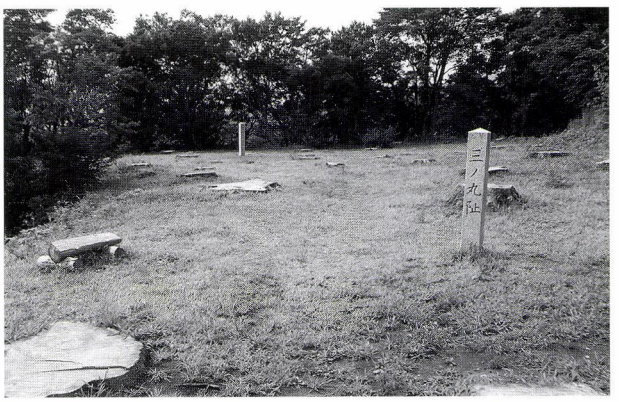
大手道から本丸を見る
大正４年刊『新潟県写真発展号』





米蔵跡　上　伐採前、平成 24 年 9 月撮影
　　下　伐採後、平成 27 年 6 月撮影





三の丸跡　上　伐採前、平成 24 年 9 月撮影
　　下　伐採後、平成 28 年 7 月撮影

大きくするために急傾斜の土地に貼り付けて落ちたところに土塁があったとしたら結果は明白で、土塁は無かったわけではなく崩落して姿を消していたことになる。あらためて言うまでもなく、土塁は屋敷の斜面を高く見せるために造られ、そこを登って攻める軍勢を落とすための柵や逆茂木が造られていたであろう。したがって、土塁は屋敷の先端に築かれていて、春日山城では、盛土の部分に土塁があったため、土塁の少ない城となってしまったと考えられるのである。

米蔵の土塁は岩盤の上に築かれていることが判明しているので崩落を免れ、景虎屋敷の土塁は崩落と開削によってその姿を消していったのであろう。

柿崎屋敷から桑取道に至る三か所の堀切と土塁は、春日山城の往時をしのばせるに十分な威容を誇る遺構であることを付記する。ぜひ、一度は訪れていただきたい遺構である。季節としては、カタクリの頃が最高であることも付け加えておこう。

春日山城の屋敷は見かけよりも大きかった

土塁と同じ原理で考えついたことがある。春日山城の屋敷跡は、我々が今見ているものより大きいということである。土塁の項でも書いたように、春日山城は斜面に貼り付けた土が落ちてしまっていることが判明したことから、斜面の傾斜角を図で復元してみた。これからすると、現在の遺構より三割程度広いことが推測できるようである。極端なものでは甘粕近江守屋敷跡がある。ここは標柱が建っているので屋敷跡と見ることができるが、なければ遊歩道の一部として見過ごしてしまいそうな小さな遺構である。これも、先端部の崩落と標高の高い部分からの崩落土の堆積によって現在のような姿になった

もので、往時はもっと大きな遺構だった推測されるのである（図1を参照）。

杉が残っていたら大惨事に？

このように今回の土砂の崩落は、かつて郭を大きくするために貼り付けた土が小規模な崩落を繰り返し次第に大きな土塊となってたまったもので、基盤層となじまず滑りやすい砂岩の上を、重さに耐えかねて崩落したと考えられるのである。

さらに、杉のことも付け加えなければならない。平成一〇年一〇月一七日、リージョンプラザ上越コンサートホールを会場に、フォーラム「謙信・景勝と春日山城　過去・現在・未来」が開催された。フォーラムは各分野の専門家が意見を述べたが、それにもましてフロアーからも多くの意見が寄せられた。

その一つが「杉の間伐」であった。

フォーラムの後、植生の専門家の指導を仰ぎながら間伐を開始し、今年の春の山桜の見事さは見るものをうっとりさせるほどの見事さであった。写真がカラーではないので実感はいまひとつであろうから、来年の早春にぜひ春日山を訪れていただきたいものである。カタクリも一面に咲き誇っているので、一度といわず二度三度と散策していただくよう期待している。



上　直江屋敷周辺から　伐採前、平成21年11月撮影
下　遺構の現況　直江屋敷から、平成28年10月撮影

今のような景観形成がなされたのは、杉の間伐によるものであるが、杉の間伐は今回の崩落を最小限に食い止める主役となったのである。二三ページ上の写真は標高一三〇mの遺構のかつての姿である。杉が生い茂り、向かって右側の杉は崩落した土に植えられていたことが今回の土砂崩落で確認されたのである。同じく下の写真の中央部に三角形で黒く写っているのが崩落土で、そこに植えられていたのだ。杉は自生したものは極めて稀で、大半が植林である。植林された杉はまっすぐ地下に伸びる根が無く、地下には傘を広げたような根が伸びている。もし、この杉が七月二七日の時点で残っていたとしたら、と考えただけで恐ろしい。土砂は杉の根を引っ張り、それに絡まった周辺の杉が引っ張られてドミノ倒しのように杉が倒れた可能性が指摘されている。逆に、杉が間伐されていたが根はまだ残っていたため、地下の根が土を支えて土砂の流失が食い止められたと指摘する考えもある。杉の適正な管理は、今後も継続されなければならない、春日山城の保全活動の根幹であろう。



謙信公銅像前から見上げる崩落現場
平成28年7月27日撮影

杉伐採後

杉の伐採は今回の災害を食い止める効果を発揮した。これは前にも記したように、フォーラムの議論が正しかったことを実証したものと評価されるものである。ところで、今後のことについても若干触れておきたい。

杉を伐採した屋敷は、屋敷に限らず春日山城全体にいえることだが、杉が無くなると眺望が良くなる、結果として眺望を確保するためにさまざまな木を伐る、ということにつながっていく。また、障害物が無くなったところは草刈が容易になり、まことにきれいに草刈が行われる。そうすると、実生（みしょう）で発芽した落葉広葉樹の苗も分からないうちに刈られてしまう可能性がある。

春日山城の屋敷跡を美しく保ち、保全していくには、山桜だけではなくモミジやカエデといった紅葉する木を、今まで以上に育てていく必要がある。そして、それらをあまり大きくしないで管理することが肝心なのである。これらの木が大きくなると、枝張りで眺望を妨げるばかりでなく、雪によって垂れ下がって斜面を損傷する恐れすらあるのだ。杉ばかりでなく、過ぎたるは及ばざるが如し、程よく管理することが求められるのだ。

たとえば、最初はクルミのような成長の早い木を適正に管理し、モミジやカエデはクルミの下で育成していく。後者が一定の大きさになったらクルミを間伐する。といった管理が必要になってきたのではなかろうか。

春日山にカタクリが咲き、山桜で彩られ、秋にはモミジが紅葉する、こんな輪廻を楽しめる場所として育成したらよいと思うのである。





本丸から　上　伐採前、平成24年9月撮影
　　下　伐採後、平成28年7月撮影

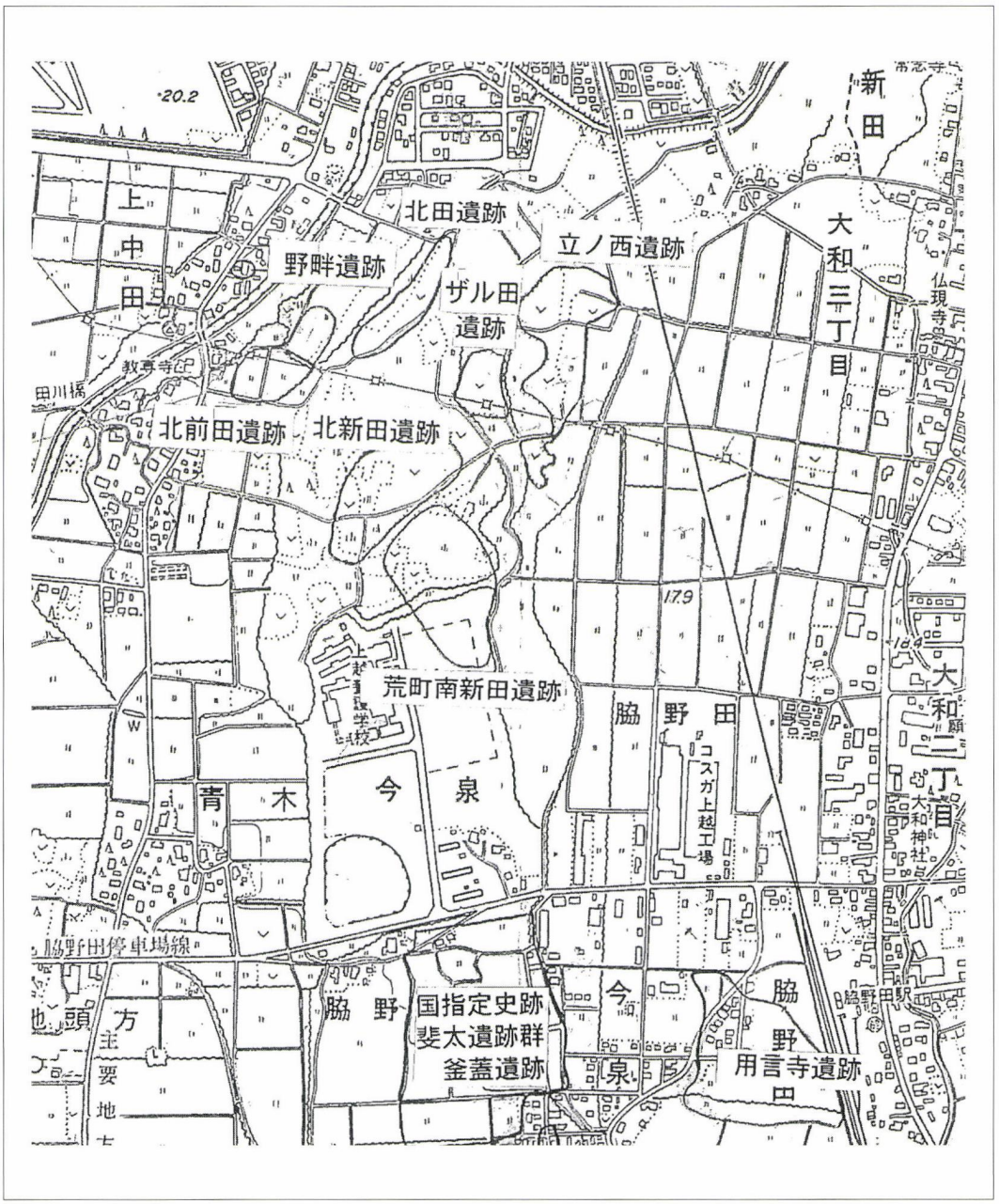
タテ地名の確認

今回の主題からは外れるが、「タテ＝館」の地名について少し触れておきたい。

筆者は、本誌三六号で「タテ＝館」、「タケ＝竹＝館」であり、いずれも「館」を意味する地名であることを紹介した。その中で、頸城では「タテ」が少なく「タケ」が多いことを指摘した。親鸞聖人の居所とされる「竹之

内草庵」は本来「館之内草庵」であるべきで、謙信政権に移行した際に使用が制限されて「竹之内草庵」になったと考えた。そして、「館之内」とされた場合それは守護の館を意味するものと推測したが、あくまでも推測の域を出ず深入りは避けた。

ところで、筆者が今お世話になっている釜蓋遺跡ガイダンスの近くでも「タテ＝館」の地名があることを知った。荒町南新田遺跡発掘調査報告書に遺跡の周辺に所在する他の遺跡名称が記載されていて、その中に「立の西遺跡」と記されていた。実態は不明であるにしても、地名で明らかに「館」地名があり、筆者の興味を刺激するに十分な遺跡名である。



遺跡分布図（新潟県遺跡地図より作成）

釜蓋遺跡の周辺は、吹上遺跡という場所で弥生時代の中期、今から二二〇〇年前ころにヒスイの玉を作る集落として始まり、妙高市の斐太遺跡と釜蓋遺跡につながってきている。濠で囲まれた窯蓋遺跡はこの地方にあった小国家の集団がいた場所ではないかとされ、発掘調査が継続されている。また、この地域は弥生時代に限らず奈良時代や平安時代を経て中世や近世の遺跡が多く知られていることから、長く青田川などの河川を利用した物流の拠点だったとも考えられている。

このような状況からすると、謙信政権になってもなお物流の拠点であったと推測されるので、そこを支配したのは謙信が重用する家臣団、もしくは一族であったことから「立＝タテ＝館」地名が残ったと推測されるのである。

◇　◇

結びにかえて

越後府中の直江津には、御館をはじめとして多くの館地名が残る。これこそ府中の歴史を知る手がかりである。これらの地名が長く継承されるようにと願っている。

今回は、春日山城の災害から見えてきた城本来の姿を描こうとしたものである。災害は起こってしまったが、これを教訓に再度春日山城に目を向け、かかわりを深めていきたいと思うのである。

（上越市専門学芸員）



説経浄瑠璃公演
3代目若松若太夫
平成28年10月1日　泉蔵院にて

歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの



直江津水道発祥の地
水源公園

直江津は、いわゆる「砂丘の上のまち」と言われる沖見町、福永町、浜町、塩浜町のあたりは古砂丘上にあるため井戸水の水質が良好で、多くの共同の井戸小屋があった。

明治十一年の明治天皇北陸御巡幸の折、新町の福永家でご休憩の際に、町中の井戸水を飲み比べて、二段になった坂道の通りにあった井戸水を差し上げたと言われている。

しかしそれ以外の地域では良質な水を得ることができず、砂やシュロを通してろ過して使っていた。

明治三一年、直江津駅が現在地に移転し、駅前通りに商店や旅館が立ち並ぶようになったが、この辺りは井戸を掘っても水質が悪く、飲料水には大変苦労していた。旅館によっては、八幡さんの砂丘から出る湧水や善光寺浜から湧き出る良質な水を私設水道として引いていた。

昭和初期には旅館だけではなく、共同で水道を引く有力家庭も現れたが、高額な費用を要する私設水道など、一般家庭ではとてもできることではなかった。

直江津町では、水道敷設の必要性を痛感して、昭和六年、町営水道敷設に関する諮問を町内全区に対して行っている。その「水道敷設諮問答申」を見ると、時期尚早二〇四二戸、敷設促進一二三戸であった。

水質が悪い地域にも関わらず促進ゼロという町内もあった。賛否の戸数のみを答申している町内もあるが、高額な工事費、利用者個々の負担額、使用料などに対して「現下の深刻なる不景気に際して加重なる納税負担に耐えがたく」と答申している町内がほとんどである。

昭和十一年、直江津町の水事情を察知した糸魚川の井上（現・井上商会）は、工事費三四〇〇〇円で、善光寺

浜の現ツクイ・サンシャイン上越の北側の砂丘上に良質な井戸を掘り当て、浄化槽・送水装置を設置した。

先のような答申では町営は無理であり、佐藤寅作を組合長に有志による直江津簡易水道組合が設立されることになった。しかし水道事業に出資することを危ぶむ声もあって設立も困難を極めたと言われている。

また、鑿井（さくせい）にあたって善光寺浜集落から、鑿井途中に集落の井戸水の水量減や水質に変化があった場合は、直ちに中止するという約定が交わされたという話もある。

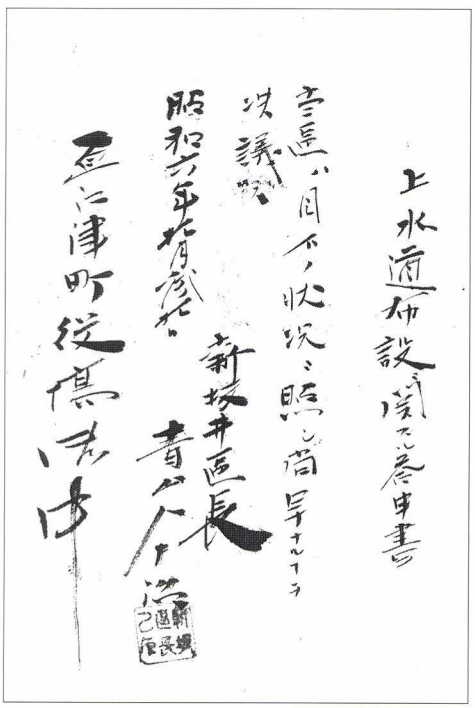
そして翌一二年一月給水を開始したが、高額な水を買うということには、なかなか理解を得られず、加入者は当初一二四戸にすぎなかった。それでも火災時の消火に威力を発揮したり、安全な水を安定して供給する上水道に理解が深まり、加入者が徐々に増加していった。



2段の坂
段差の中央の植栽のあたりに2本の井戸があった。

昭和三〇年、当時の直江津市が上水道事業を開始することになり、簡易水道組合は市に売却された。

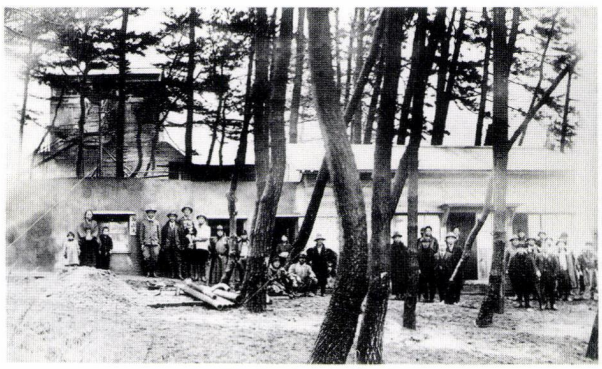
組合解散にあたって、売却益の一部を直江津市の奨学金に充てるなどの事業を行い、水源地のあった一角に魚籃観音を建立し、直江津水道発祥の地として「水源公園」が整備された。



新坂井区の答申書

水道通水記念絵はがき

松林の中の施設



景全地源水道水津江直



〔遠ノ松間アルバ長合組道水〕況實ノ水通初道水津江直

鑿井現場と浄化・給水塔



魚籃観音

三十三観音の一つ。魚を扱う美女が、観音経・金剛経・法華経を暗唱する者を探し、三つの経典を読誦する者と結婚したが間もなく没し、この女は法華経を広めるために現れた観音とされた。魚を入れた魚籃を持つものや大魚の上に立つものもあるが、魚籃観音は全国的に見てあまり例がなく珍しい。制作は樋口石材店。



況實驗試水放栓火消道水津江直

デモンストレーションのために消火栓から放水
電柱のあたりは直江津南小学校の西側の昇降口への曲がり角。



水道管の敷設
前方が直江津南小学校。配管は商品名そのままに「エタニットパイプ」と呼ばれたアスベストセメントパイプ。今では使われることはない。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

あけましておめでとうございます

『鶏口となるも牛後となる勿れ』（鶏口は鶏の頭、牛後は牛の尻、あるいはしっぽのこと。大きいものの一番後ろにいるよりも、小さなものの頭であるほうがよいという意味。）

今後も地域振興を旨とし、上越後の残したい歴史と思いをお届けいたしますので、変わらぬご愛読をお願い申し上げます。（梅田）

目次

特集　「北前船」のまちを巡る　4
付『おらが在所』　13
春日山城と越後府中　3
―平成二八年七月二七日の春日山城―
上越市専門学芸員　小島幸雄　17
巻頭エッセイ・わたしの直江津
わたしの直江津とは　ひぐちきみよ　2
歴史は「今日」への手紙
直江津水道発祥の地　水源公園　28

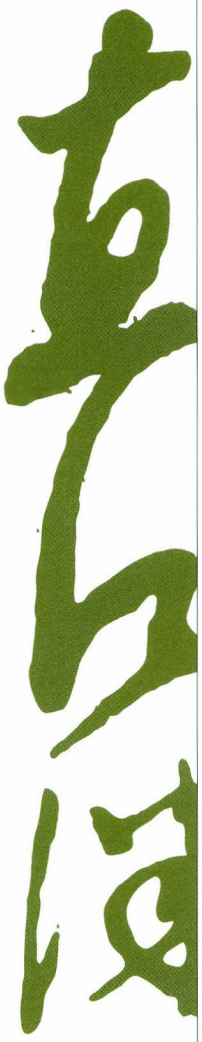
「直江の津」
第一三巻二号　通巻三九号
発行日／平成二八年十二月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信栄社
電話〇二五（五四五）〇二〇二
上越市中央二―八―一
制作協力・北越出版

2016・2号

直江の津



発行／平成二十八年十二月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五〇〇円